ロドルフォ・ミューラーである。ある時、ロドルフォがザルツァハ(Salzach)川に落ち、九死に一生を得る。救助したのはリーナの父スタアンカー伯爵で、彼の居城で治癒するが当然、城にはリーナが住んでいる。リーナはこのときフェデリーコと婚約していたが、素行が悪いので父親スタンカーはこの婚約には賛成でなかった。リーナはロドルフォを看病している間にお互い愛が芽生え結婚する。しかし結婚後早々、ロドルフォに逮捕状が出ているので今すぐ逃げろとラファエーレは嘘を言って出立さす。何も知らないリーナは伝道の旅と思っている。結婚生活の不満を父親にぶちまける。父親はリーナに、彼は牧師としての義務があり、少しの我慢はしなさい。と慰める。

２，不倫相手のラファエーレはフェデリーコとは友人であり、ロドルフォとも教会を通じて知り合いである。リーナがロドルフォと結婚しても結婚生活には大いに不満ということも彼は知っている。彼はリーナを秘かに愛している。また、教会内部の事情も知っていて、ロドルフォが伝道の途中でインスブルックから「アッサスヴェリアーニ（Assasveriani）の賛歌」を持ち帰るので帰宅が予定より遅くなるとリーナ達に伝える。普段からこのように遊び仲間として人的交流があるなかで、不倫事件が起きる。

このような事項がピアーヴェの台本には無く、ロドルフォ・ミューラーがスティフェリウスとして伝道から帰って来る。オペラはここから始まり、名前もイタリア語「ステッフェーリオ」とした。

当会報「Lirica」ヴェルディのオペラ作曲ページを見ると16番目「ステッフェーリオ」と17番目「リゴレット」の初演は４か月しかたっていない。つまり、この２曲は同時に作曲、進行したもので「ステッフェーリオ」の音楽は非常に充実したものになっている。特に２幕、３幕終りまでの舞台は観衆を引き付ける。以前の作品とは程遠い迫力がある。

＊ヴェルディ・オペラ第16作目「ステッフェーリオ Stiffelio」研修会の教材

コヴェント・ガーデン王立歌劇場管弦楽団、合唱団　指揮サー・エドワード・ダウンズ
演出エリシャ・モシンスキー
台本フランチェスコ・マリア・ピアーヴェ

主な出演
ステッフェーリオ（ロドルフォ・ミューラー）・・・ホセ・カレーラス
リーナ（スタンカーの娘でロドルフォの妻）・・・・・キャスリン・マルフィターノ
ヨルグ（教団の老牧師、ステッフェーリオに心酔）・・・・・グゥイン・ハウエル
スタンカー（伯爵、陸軍大佐、リーナの父親）・・・グレゴリー・ユリシック、
ラファエーレ（チロルの貴族）・・・ロビン・レガーテ
フェデリーコ（リーナの甥）・・・リントン・アトキンソン

1993年1月コヴェント・ガーデン王立歌劇場　約120分

2025/10/05 錦職昭彦